

かぐらおか

(題字は元学長 山田守英氏)

第 53 号

昭和62年9月10日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



屋外リハビリテーション施設

就任にあたって……………下田 晶久…………2	第34回北海道地区大学体育大会……………8
副学長に就任して……………安孫子 保…………3	第30回東日本医科学学生総合体育大会……………8
ある講義から……………鮫島 夏樹…………4	ピアノが寄贈されました……………9
就任にあたって……………笹森 秀雄…………5	学生教育研究災害傷害保険について……………9
卒業生の動向……………6	課外活動短信……………10
第13回医大祭……………7	窓 外……………内田 倅喜…………10



就任にあたって

学 長 下 田 晶 久

黒田前学長の任期満了ご退官の後を受け、第3代学長として、卒業生累計 897名、大学院課程博士57名を送り出した旭川医科大学を、7月1日付けでお預かりする事になった。思えば昭和54年春、初めての卒業式に社会の耳目が集まり、同時に大学院が開設されて初の入学者10名を迎え入れた頃の事は、副学長として初代山田学長のお手伝いをする立場にあった為か未だに記憶に新しい。その頃に較べると現在の旭川医大は、上記の数字を見ただけでも最早“新設医大”の域を脱して、言わば青年期に入った大学と言えるであろう。ここに至るまでに開学以来13年余りの月日が経っているが、その間に払われた教職員・同窓生、学生等全ての人々の努力の賜物として本学の今日がある事を思う時、一層の発展を期して舵取りさせて戴く重責を痛感する次第である。

一般に学問の府としての大学には、研究と教育と言う二つの機能が求められている。研究には、時流に左右されない純粋な学理の追求から、その時代々々における社会の要請に直接応える研究まで選択の幅は広い。これらの研究活動にも必然的に、次の世代を担う人材を育てる教育行為が含まれていることは言うまでもない。一方、狭義の高等教育機関と位置付けられる大学の教育は、学生に職能を身に付けさせる専門教育を目指している。戦後我が国の社会の高等教育志向がもたらした大学の急増が、今ようやく反省期を迎え、大学の自己評価を求める声が高まって来た。評価の基準は何かと言う事になると論議の多いところであろうが、本来大学が備えるべき二つの機能のそれぞれについて問うと同時に、両者の均衡の程度も問われなければならない。加えて医科大学の場合は、教育・研究に欠かせない附属病院が即地域住民に開かれた医療提供の場となっており、日常の診療行為も亦評価の対象となる。そうして終局的には、卒業生一人々の活動に現れる成果こそ最も重要な評価対象であろう。

言い替えると、大学の知的生産には、学問的成果や技術開発と共に、専門的能力を備えた人作りがあると言える。医科大学の場合は特に後者を大切に考えなければならない。それは卒業までに6年間、研修医として2年間、さらに2・3年の経験を積んで初めて独り立ちするのが医師の一般的なコースであり、新鮮な感覚と情熱を抱いて入学する若人の多くが、多感な青年期の十年余りを過ごす場となっているからである。孟母三遷の故事に倅つ迄もなく個人の生い立ちはその環境に左右される処が大きい。医師は、疾患そのものを対象とするに留まら

ず、疾患を持つ患者を全人的に癒やさねばならない。それに相応しい人間性を培う場が医科大学である点に思いを致すとき、その環境作りの重要性が浮かび上がって来る。

他方、旭川医大を取り巻く外部環境の一つに北海道の医療事情がある。この地に新設が決定した要件の一つであった道北地方の医療過疎もこれに含まれる。医師養成に要する年月を思えば、未だ々々求めに応ずる人材を貯えるには至っていないと考えられるが、少なくとも総合的な医師配置のルール作りに、本学も積極的に参画すべき時期に来ていると思われる。大学の側からは、卒業教育の延長線上に据えるべき問題でもあろう。これにはもとより道内他大学との密接な連携が必要であり、簡単な事とは思われないが、全国的な医師過剰の予測が明確となり、養成数の削減が打ち出された今と成っては、道民の不安と苛立ちを和らげる施策の一翼を担う為に急がねばなるまい。

“青年期の大学”それは何と快い響きを持つ言葉であろう。未来に向けての無限の可能性を感じさせる。しかし、同時に未熟さを容認する表現でもある。その明るい未来は、これまでに築き上げられた土台の上に着実な思考と行動を積み続ける、現在の努力があって初めてもたらされる事を銘記したい。創設期の本学キャンパスには重粘土が露出し、植樹も緑化も容易に受け付けられない劣悪な地質との対応に悩まされて来たが、努力の甲斐あって近頃ようやく樹々に生長の兆しが見え始めた。自然環境でさえ、工夫と努力によって改善出来る事例を身近に体験した今、学の内外を問わず教育・研究・診療上の環境整備を、教職員各位をはじめ同窓生諸氏と共に精一杯進めて行きたいと願うものである。学生諸君もどうか日々の充実を志してこれに就いて戴きたい。





副学長に就任して

副学長 安孫子 保

このたび、教育研究及び厚生補導担当の副学長を拝命し、その責任の重さをひしひしと感じております。下田学長の心暖まるお話しと御助言、それに友人の励ましによって、このような大役を引き受けてしまいました。本当に大丈夫出来るのだろうかと今でも心配しているのですから、頼りにならない副学長です。皆さんの御指導と御鞭撻を心からお願い申し上げます。

さて、私は一体何をやったらよいのだろうか、まず考えねばなりません。学長を補佐するのは勿論ですが（多分学長に助けて頂く方が多いと思いますが）、教育研究及び厚生補導に関するマネジメントをすることになります。業務は考えるだけでも頭が痛くなるほど沢山あります。学校は毎日活動しているのですから、これらの業務を怠れば、先生方や学生さんにも迷惑がかかることになります。学生さんの一番嫌いな試験と、それにとまなう進級判定の業務を怠れば、学生さんはさっそく困ります。何しろ進級できなくなるのですから……

教育とは何でしょうか。Education というのは「引き出す」という意味だというのは誰でも知っています。では教育は人から何を引き出すのでしょうか。引き出されるものがない人はどうすればよいのでしょうか。そんなことを考えると教育は成り立ちません。教育は楽観的な考えによって支えられると私は思っています。先生は自分は教える能力をもっており、生徒はそれを受け入れて消化する能力を持っているという前提で話をすすめて行くうちに、本当の教育が芽生えてくるのです。先生と生徒の心のふれあいこそ、教育において一番大切なものだと思います。いくら良い機器がそろっていても、心がなければ教育はありません。また、教育は議義室の中だけにあるわけではありません。研究室の中にも、サークル活動の中にも、病室にも、いろいろなところにあります。学生さんは、あらゆる機会を捕えて、先生方との心のふれあいを求めてください。

この大学では、教職員の他、大学院生、研究生などたくさんの方が研究活動を行なっています。なぜ、研究をするのでしょうか。正直言って、初めは博士をとりたからという理由が多いと思います。これは名誉欲です。でも名誉欲があってもよいではありませんか。人間誰しももっていますし、博士をとるためにはかなりの研究をしなければなりません。これは本人にとって有意義であるばかりでなく、学問の進歩にも役立っている筈です。

では、博士をとってもなぜ研究を続けたいのでしょうか。

これが問題です。研究を続けたいというのは、結局は知識欲です。その研究成果が、すぐ役に立つとはかぎりません。このような極めて個人的な欲の現れである研究に対して、日本国は援助をしているのです。政府ばかりではありません。民間からの援助も沢山あります。ですから、世の中に研究者ほど幸せな人はいないと思います。研究に対する援助は、日本ばかりではありません。世界各国の政府や民間の財団は研究に対して、沢山の援助をしております。その目的は単にその国の利益のためばかりではなく、世界人類の利益のために援助をしているのです。

ところで、世の中には自分と同じような研究をしている人がいるものです。日本の中になくとも外国にいる場合もあります。同じようなことを研究している人が集まって、その研究のことについて話し合うと、とても愉快であるばかりでなく、自分の研究の進み具合もわかるし、これからどのように研究をすすめていったらよいのかという考えも浮かんできます。また、文献を読んだだけではよくわからなかったところが、話し合っただけでよくわかってくる場合もあります。従って、研究者が交流をするということは、学問の発展にとって、とても大切なことです。とくに、外国の研究者との交流は大切です。何しろ、外国人は育った環境も教育も我々とは違っています。我々日本人では考えもつかなかったことを考えていることもあります。外国人にとっても、同じことが言えると思います。我々の大学でも外国との交流はありますが、全体としてみれば、まだまだ充分ではありません。この点は何とかしなければなりません。幸い、本学にも国際交流委員会ができましたので、これからこの委員会が大いに活躍することになるでしょう。しかし、国際交流には多額のお金が必要です。国際交流のための基金を集めるにはどうしたら良いのか、これがこれから解決しなければならない大問題です。

とにかく、私は今、副学長一年生として、少しでも皆様のお役に立つためにはどうしたら良いのか、どうしない方が良いのかを勉強してゆきたいと思っています。



ある講義から

副学長 鮫島夏樹

6月下旬のある日、黒田前学長に依頼されて第1学年の医学概論の講義の1コマを臨時に受け持つことになった。何を話したらよいか分らなかったが、私なりに医学について考えて来たことや医者としての心掛けみたいなものを何とかまとめて講義に出かけた。教室に入ると教壇に近い席の何人かは私の方に注目したが、大多数は無関心で互いに話し合い背を向けたままのものも何人もいた。暫時、教壇で待ったが私語は一向に収まる気配はなく仕方なしに騒音の中で話を始めたが、私語は講義前に比べ幾分静まったとはいえ最後まで止まなかった。話を始めて間もなく1人の学生がつかつかと教壇に近寄り、……を忘れたので取りに行つて来て良いか、と尋ねて来た。話の腰を折られてびっくりして許可を与えたが、驚いたことにそれから数分ぐらいの間隔で引きつづき2名の学生が同じように、……したいので出て行って良いか、という様なことを申し出て来た。3人目の時に私は最早、話の筋道を忘れ、場ちがいの所に出た様な窮屈さで講義をつづける意欲を殆どなくしてしまった。それから間もない或る日、私は臨床実習に来た第6学年の学生に慨嘆してこのことを話し同意を求めた。ところが、彼等に、そんなことは大して驚くにあたらぬ、自分達も1年目の時はそんなものだったし、そのうちに良くなりますよ、と逆に諭されてしまった。自分の学生時代はあんなではなかった、と思いたいのだが、昔の思い出というものは月日とともに粉飾され、美化され、増幅されるものである。大人になって大人の気持ちで子供の時の思い出の場所を訪れるときまって幻滅するのと同じで、6年目の学生達にそういわれて冷静になって振り返ってみると、社会的環境の違いこそあれ、自分の学生時代も今の1年目と大同小異であったかもしれぬと思うようになった。彼らも結構やがて立派になって行くから何も慨嘆するには及ばない、1年目の学生と臨床実習に来る6年目の学生との対比がその成長の証ではないかと、改めて納得する気持ちになった。事実、学生達の変わり方は目覚ましく卒業後教育期間を含めて段階的に一般教育課程から専門教育課程、さらに卒業後研修期間と区切ってみると彼らの成長振りは一層はっきりするようである。修得しなければならぬ医学的知識の量は昔と比較にならぬ程増加し、かつ年々増加して行くが、若い彼らには余り苦にならず新しい夫々の環境の変化に立派に適応し進んで行く。こうしてみると教育環境の重要性が改めて認識されるが、丁度、明治の者が大正の者を、大正の者は昭和の人間を、昭和の人間は恐らく21世紀の人間を歎く様に、時代の移り変わりとともに何か古い時代の良きものが失われて行く様な杞憂から、新人類とかいわれる彼らが本当に人の痛みが

分る医者になるのだろうかと少し心配するのである。医学知識の修得については何ら心配ないのであるが、その過程で医者の素地が出来て行くのであろうかと思うのである。

科学の進歩は事物を対象化する論理的な物の見方をうえつけて来た反面、直観的、総合的な物の見方は遠ざけられて来た。この習慣は人と人との関係において互いに共感し合う習性を知らずのうちに失わせ、これが一般的な風潮になった。病人を対象とする医療の基本に欠かさないのが病人の気持ちを理解することであるが、医療の面でもこうした傾向がないとはいえない。医学概論は医学教育の課程で必須であるが、医の倫理などといわれても知識としては理解されても精神の中まで容易に組みこまれてこない。疾患を学問的に理解することのほかに、疾患が患者に与える影響を知り患者を全人的に理解することは結局は医師の人間性に依存するように思われる。従って医師は豊かな人間性を身につけるべく努めなければならぬが、これは医学知識の修得に比べれば極めて困難なことである。一朝一旦に出来ることでなく、もとより僅か6年間の医学教育の期間からは大きくはみ出したことであり、恐らく幼児教育の時期から育まれねばならぬ問題であろう。唯、多感な学生時代であるからこそ大いにこのことを考えてほしいと思うのである。

近代科学の進歩は我々に機械論的見方をとらせて来た。その傾向が増すにつれて病いの人間的洞察は稀薄になる。これは物質文明と人間性との必然的な関係であるかもしれぬが、21世紀の医学を考えるうえで非常に重要なことである。過日、“21世紀の医学”と題する本間三郎千葉大教授の興味ある講演を聞く機会があった。それによると脳の生理学の分野でも人間の思考のメカニズムにもメスが入りつつあるそうである。最近の生命科学の発達は次々に新しい分野を開拓し今や生物の誕生にすら迫ろうとしている。こうして無限の進歩を必然とする科学は容赦なく医療の分野に入りこみ人体を技術的に支配しようとする。素朴な“生命を救い、痛みを和らげる”といった医療の範囲は医学技術の進歩とともにひろげられ、その意味は一層複雑になった如く感ぜられる。

生命科学の謎は無限に次々と明らかにされて行くであろう。とすると人間の医療はどういう方向に進んで行くであろうか。自然科学が如何に進歩しようとも、それは人間の生き方を教えるものではない。21世紀は、人間は結局どうあらねばならないか、が問われる世紀になるような気がする。

このたび医療担当副学長に就任した機会に、ある講義体験から医学教育について感想をのべた。



就任にあたって

附属図書館長 笹 森 秀 雄

この度、牧野教授の後を受け、8月1日付で附属図書館長に就任しました。僅かひと月足らずの勤務ですが、この間、本学図書館が歩んできた経過および現在抱えている諸問題などを聞くに及んで、今更ながら歴代図書館長の御尽力と図書館スタッフの御苦勞が理解され、ただただ頭が下るとともに、責任の重さをひしひしと身に感じている昨今です。「就任の辞」を書くようにとのことですが、以下の「図書館雑感」ということでお許しいただきたいと思ひます。

さて、人間はいろいろな記憶をもっていますが、その記憶は、純粹に私的な個人的なもの、多くの人々が共有する社会的なものとの、二つに分けることができると思ひます。人々の共有にならない私的な記憶は、おそらく個人の死と共に消滅してしまうでしょうが、社会的な記憶は、永久に生き続けるものと思ひます。この共有の記憶を整理し、再利用するという画期的な能力と努力が、今日の人類の進化を可能にしたものと思ひます。したがって、社会的な記憶を生み出し、貯え、利用する方法を根本的に変えることは、人類の今後の進化に触れることにもなります。

人類はかつて、二度にわたって社会的な記憶に大きな変化を与えたとされています。アルビン・トフラーによりますと、一度目のそれは彼が「第一の波（農業革命）」、二度目のそれは「第二の波（産業革命）」の文明と呼ぶ時期に起きています。

まず最初人類は、共有の記憶も私的な記憶も同じ場所、つまり個人の頭の中に貯えなければなりません。部族の長老・賢人といった人達が、共有の記憶を、歴史、神話、伝承、伝説といった形で記憶し、それを物語、歌、詠唱、規範などとして後世の人達に伝えました。獣の捕り方、火のおこし方、イカダの造り方、羊や牛の飼ひ方まで、集団に伝わるあらゆる経験は、人間の神経細胞や神経膠、あるいは染色体の中に蓄積されました。しかしこのような形で伝承が行われていた間は、社会的な記憶の範囲は非常に限られていました。なぜなら、長老・賢人の記憶力が如何に優れていたとしても、また歌や教訓がどんなに記憶しやすいとしても、人間の頭の中に蓄えられる記憶には限度があったからです。

第二の波の文明は、記憶量の増大を阻んでいた障害をとり除いたということが出来ます。つまり第二の波は、読み書きの能力を社会全体にひろめ、記憶が組織的に残されるようになりました。多くの図書館や博物館がつく

られ、資料整理用のキャビネットが考案されました。要するに第二の波の文明は、社会的な記憶を人間の頭の中から外へ引き出し、それを記憶する新しい方法を発見しそれ以前には考えられなかった広い範囲に行き渡らせたということが出来ます。蓄積される知識の量が増加したことによって、社会的な記憶は、技術の革新や社会の変化の速度を早め、その結果、この第二の波の文明は、これまでにない速さで変化し発展することになりました。

ところが今日、私達は社会的な記憶に関して、従来とは全く異なった新しい段階、つまり「第三の波」の文明の段階に突入したといわれています。情報伝達手段の急速な脱画一化、新しい情報伝達手段の発明、衛星による地図の作成、コンピューターによる入院患者の監視、企業におけるコンピューターによる資料整理、こうした事実は、私達が文明の諸活動を、微細な点まで克明に記録するようになったということを示しています。しかし、この第二の波から第三の波への社会的な記憶の推移は、単に量的なものだけに限ったものではないようです。私達はいま、自分達の記憶に、全く新しい一つの生命を与える段階にきているのだということができそうです。

先にも述べましたように、社会的な記憶は、産業化の進んだ第二の波の文明によって、人間の頭の中から外に引き出され、それが書物、新聞、写真、フィルムといった人間がつくり出したものに記録されるようになりました。しかしこれらのものは、すべて受動的で静的な存在です。その点第二の波の文明は、社会的な記憶を積極的にひろめる働きをしましたが、同時に記憶を凍結させる作用をも果たしたということが出来ます。ところが今到来しつつある第三の波は、この社会的な記憶を多方面にひろめるだけではなく、更に第二の波の時代に凍結させられていた社会的な記憶の生命を、再びよみがえさせようとしています。それを果しているのがコンピューターですが、要するに、記憶量の増大とその活性化という二つの機能をあわせ持っているという点で、それは大きな推進力になるものと思ひます。

今この国の図書館も、トフラーのいうこの「第三の波」の文明（高度情報化）に洗われつつあります。本学の図書館もまた例外ではないと思ひます。私はこの機会に、これからの図書館のあるべき姿について、じっくりと勉強してみたいと思っております。

（社会学 教授）

卒業生の動向

去る3月25日(水)に本学を卒業した124名の勤務(連絡)先は次のとおりです。

また、4月に行われた第81回医師国家試験には127名が受験し、120名(61年度卒業生118名)が合格しました。合格率は94.5%(同95.2%)でした。

(学生課)

第13回医大祭

テーマ

Turning Point

去る6月18日(木)から21日(日)の4日間、恒例の医大祭が行われました。

医大祭は今年で13回目を迎え、テーマ「Turning Point」には新たな方向への転換期、との気持が込められています。

開催中には、仮装行列・前夜祭をはじめ、模擬店・医学展などの企画が実施され、盛況のうちに無事終了しました。(学生課)



前夜祭



第13回医大祭を振り返って

第4学年 大坪 力

大学2年生の時初めて大学祭実行委員をやってから、今年まで実行委員を5回行った。周囲の状況もあるが、結果として実行委員長という役が回ってきた。

実行委員として大学祭に関わっていると外部から医大祭を見れなくなる。そして、医大祭は自分たちが作っているのだとか、自分たちが作っていかなくてはならないのだかと思ひ込むようになる。実行委員はそれなりに真剣に各企画に取り組むのだから一般学生の協力や参加が得られない時に「みんな、いったい医大祭をやる気があるのか。」「現代の学生はしらけている。」あるいは大学祭の内容そのものに対して「くだらない。」と言ったことにも成り得る。これはある意味では正しい。確かに医大祭の創始期、過去のパンフレットや写真を見るとみんな医大祭を作ったのだと言う誇らしげな印象を受ける。今とは違ったのである。

私が2年生の時、一度大学祭をつぶし、再び学生に医大祭を作り上げる情熱があるかどうか試して見よう。そして、その情熱がなければ医大祭がなくなるのも止むなしと言った意見が実行委員から提起された。具体的には前年度の大学祭実行委員がその年実行委員をやらぬと言いだしたのである。この年より私は大学祭実行委員

をやるようになったわけであるが、その時はこう考えていた。「やりたい奴がやればいい。」そして、「医大祭は俺たち実行委員が作るんだ。」と。

後に大きな誤解をしていたことに気づいた。それは、実行委員が医大祭を作るのではなく、実行委員以外の人々の意志と協力により医大祭が作られると言うことである。実行委員が要であることは確かであるが、実行委員も含めて多くの学生がこのことを錯覚しているのではないだろうか。何も実行委員が医大祭の存亡を背負っているかのごとく気負う必要はないし、それは誤りである。

私は今年の医大祭でここを明確にしたかった。そのために従来の実行委員の仕事を広報活動と総務のみとし、医大祭における催しはすべて学生から企画計画書が提出されたものを自分たちで行うこととした。即ち、それは学生から企画計画書が提出されなければ過去盛況であったスポーツ大会も前夜祭も医大祭から姿を消すことも考えられた。この運営方針を学生に提示したのが4月中旬であったから、学生にその受け皿が十分にあるとは言えなかったが、四年間の実行委員で得た人脈によりかろうじてスポーツ大会と前夜祭は行うことができた。

この結果、実行委員の役割は明確になり、誰が医大祭を作るのかハッキリしたのではないかと思うがいくつかの問題が生じた。1つは実行委員の仕事が企画局を除いたことにより非常につまらないものとなったこと。かつて実行委員が企画した前夜祭・スポーツ大会・コンサートなどは今まで大学祭実行委員として関わってこなかった学生からは出にくいこと。そして、各企画の横のつながりが得にくく全体として医大祭としてのまとまりを欠いた点である。この問題は前夜祭・スポーツ大会などの学生が多く参加できる企画と合わせて考えるならば解決の糸口が見つかりそうである。

一方、今年の様な運営方針の下で今まで見られなかったいくつかの催しが登場した。演劇・詩の朗読に乗せたビデオ上映・発展途上人の会「大地」による展示・パネルディスカッションなどである。こういった人々の活動が旭医大の伝統を作り上げるのだという思いとその発表の場が医大祭であったことに医大祭の別の在り方を見出した気がする。必ずしも医学展に固執することはない。我々は医学を習得すると同時に人格をも築き上げねばならないのだから。

話は変わるが医大祭における最も大事なお客様は緑ヶ丘の小中学生の方々である。この頃、この少年少女たちに夢を与える様な医大祭にしたいと思う様になった。子供を子供と認めつつ、その人格を尊重し、思い出の1ページとなる様な医大祭ならば十分な価値がある。この事を頭の隅にでも入れておいていただけないだろうか。

最後に、医大祭開催に御協力いただいた多くの一般市民の方々並びに教職員の方々にこの場を借りて敬意と御礼を申し上げる。

(第13回医大祭実行委員会委員長)

第34回

北海道地区大学体育大会

第34回北海道地区大学体育大会は、北海道大学が当番校となり、7月11日(土)～13日(月)の3日間、開催されました。

本学は16種目に参加し熱戦をくりひろげ、次の成績を収めました。

(学生課)



大会成績一覧

種目	順位				
	優勝	準優勝	3位	旭医大	
陸上競技	男	函教大	北大	専修短	4位
	女	道女短	函教大	釧教大	10位
準硬式野球	北学園	道自短	樽商大 駒沢教	1回戦	
軟式庭球	男	札学院	室工大	道工大 北学園	棄権
	女	道女短	帯畜大	札教大 函教大	棄権
バスケットボール	男	道都大	旭教大	釧教大 北学園	1回戦
	女	道女短	札教大	帯畜大 静修短	2回戦
バレーボール	道都大	岩教大	旭教大 道工大	ベスト8	
サッカー	釧教大 酪学園		帯畜大 北見工大	1回戦	
卓球	男	旭川大	道工大	室工大 北学園	決勝トーナメント進出
	女	道女短	栄養短	北星学園 北星女短	予選リーグ

バドミントン	男	札学院	北星学園	札教大	1回戦
剣道	男	北大	旭医大	札医大 道工大	準優勝
	女	苫駒短	道女短	札教大 釧教大	棄権
弓道	男	室工大	北大	帯畜大	7位
	(女子はオープン)	女	小樽商大	帯畜大	北大
総合	男	道都大	北大	道工大	17位
	女	道女短	札教大	静修短	18位

第30回

東日本医科学生総合体育大会(夏季)

第30回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)は東海大学医学部の主管で7月21日(火)～8月2日(日)まで、伊勢原市を中心に各競技が行われました。

本学は22種目に参加、陸上競技部・準硬式野球部が優勝するなど各種目に好成績を収め、総合では4位に輝く健闘ぶりでした。

(学生課)

大会成績一覧

種目	順位				
	優勝	準優勝	3位	旭医大	
陸上競技	男	旭医	新潟	千葉	優勝
	女	筑波	東京	女医	
準硬式野球	旭医	自治	山梨	優勝	
硬式庭球	男	東医	群馬	千葉	2回戦
	女	順天	横市	新潟	3回戦
軟式庭球	男	東北	山形	群馬	予選リーグ
	女	東北	山形	女医A	棄権
卓球	男	東北	昭和	自治	4位
	女	女医	新潟	旭医	3位

バレーボール	筑波	自治	旭医	3	位	
バドミントン	男	自治	新潟	東北 慈恵	3	回戦
	女	新潟	岩手	福島 慈恵	2	回戦
サッカー	札医	独協	新潟		1	回戦
バスケットボール	男	東医	福島	秋田	2	回戦
	女	聖マ	新潟	女医	3	回戦
柔道	東海	福島	群自 馬治			予選リーグ
剣道	独協	千葉	昭慈 和恵			予選リーグ
弓道	昭和	信州	旭医		3	位
空手	札医	日大	群馬			
水泳	男	新潟	東北	医歯		
	女	女医	順天	東北		
ゴルフ	独協	慈恵	東邦			
総合	新潟	東北	自治		4	位

個人

陸上

男子	200m	2位	小林 伸行 (2年)
	400m	3位	加藤 弘明 (1年)
	800m	1位	福家 信二 (4年)
	5000m	3位	小野沢 司 (4年)
	400mH	2位	加藤 弘明
	4×400mR	1位	
	円盤投	3位	横田 英典 (6年)
	三段跳	1位	原 則行 (5年)
	槍投	1位	三浦 亮 (3年)
柔道	重量級	優勝	泉 信一 (3年)
弓道		3位	新保 和賢 (6年)

ピアノが寄贈されました!!

この6月で退官された黒田前学長から、学生の課外教育用としてピアノが寄贈されました。

贈られたピアノは、ヤマハU30-BLという機種で、鍵盤は88鍵あります。

学生課ではこのピアノを第5セミナー室内調整室に置き、医師を目指す学生の課外教育に供し、情操豊かな人格の完成に役立てたいと考えていますので、皆さんも大切に利用してください。

(学生課)

学生教育研究災害傷害 保険について

本学は、学生の教育研究活動中の不慮の災害事故補償のために「学生教育研究災害傷害保険」の賛助会員大学となり、加入受付事務などを行っています。

昭和61年度の保険請求件数は10件で、支払保険金総額は51万3千円です。事故の態様は課外活動中7件、学校行事中1件、正課中2件です。

今年度は、6月現在ですすでに11件発生しております。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備えできるだけ全員加入するようにしてください。

加入手続は学生課厚生係で行っています。受付期間は、毎年4月1日～4月30日及び10月1日～10月31日です。保険料は6年間で4,050円です。

保険加入率 (入学年度別)

入学年度	入学者数	加入者	加入率
62年度	120人	80人	66.7%
61年度	120	85	70.8
60年度	120	69	57.5
59年度	120	82	68.3
58年度	120	99	82.5
57年度	120	82	68.3
合計	720	497	69.0

(学生課)

課 外 活 動 短 信

陸上競技部

全医体 (8/9 横浜市三ツ沢総合グラウンド)

200m 第1位 第5学年 前田 高宏

三段跳 第1位 第5学年 原 則行

800m 第1位 第4学年 福家 信二

400mリレー 第1位 (大会新、3分29秒)

原・小林・福家・前田

ボディビルディング部

第25回北海道学生パワーリフティング春季大会

(5/17、札幌学院大学)

フェザー級 第2位 第3学年 加藤 英夫

ライト級 第2位 第2学年 木村 圭介

総合 第3位

窓 外



内田 倖喜

アボガドロ定数

6月10日付朝日新聞夕刊に載っていたことだが、一連の基本物理定数が変わった。その中で、アボガドロ定数 (N_A) とはいえ物理や化学に関係のある人、またどこかでいつか物理や化学の試験を受けたことのある人にとって、大変馴染深い、なつかしい、あるいはかえって思い出すのも嫌な数値である。この値が一定不変のものとして誤解している人もあるかも知れないが、昭和62年度版理科年表に載っている値が、それ以前のものとは変わっている。昭和61年度版には $6.022045 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ となっていたものが、 $6.0221367 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ となった。もっとも、 $6.02 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ という値で充分満足している人々 (高校レベル) にとっては何ら影響のない改訂ではある。

いままでをふりかえてみると、1960年発行の物理化学の本には $6.023 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ 、1971年発行の理化学辞典には $6.0225 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ 、1984年発行の物理学辞典には $6.0220978 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ 、1984年発行の生化学辞典には $6.022045 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ 、そして1986年発行の理科年表には $6.022045 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ となっている。言い方は変だが一見落付いて来たように思えたものである。アボガドロ定数は化合物の正確な分子量と密度を知り、さらにX線回折でその化合物の結晶の単位格子の一辺の長さを精密に測定して算出される。今回の改訂の基礎となるのはケイ素結晶のとなり同士の原子間距離の測定精度がよくなったことである。新しい値は科学連合国際評議会の科学技術データ委員会 (CODATA) が1986年勧告したものである。勿論アボガドロ定数が変わるといろいろな基本物理

定数といわれるものも変わってこなければならない。電気素量 (e) は $1.60217733 \times 10^{-19} \text{ C}$ 、ファラデー定数 (F) は $96485.309 \text{ C mol}^{-1}$ 、ボルツマン定数 (k) は $1.380658 \times 10^{-23} \text{ J deg}^{-1}$ 、プランク定数 (h) は $6.6260755 \times 10^{-34} \text{ J sec}$ となったりする。

話が一寸それるけれども、長さの単位はだれでも知っているようにメートルである。この基準も変遷の歴史をたどって来た。私くらいの年代の人々は小学校で、「国際原器が保管されていて、その1mがすべての物指の基準です」と教えられたことを思い出さず筈である。元来は地球の子午線の北極から赤道までの長さの 10^{-7} 倍に基づいて、1889年原器がつくられた。その後原器と光の波長との比較が行われ、 ^{86}Kr 原子の橙色のスペクトル線の真空中における波長 ($\lambda = 605.780211 \text{ nm}$) の1650763.73倍を1mとすることになった。それが1960年のことである。さらに、光の速度の測定精度が大変向上し、現在は $299792458 \text{ msec}^{-1}$ が定義値となっている。その結果、1983年に光が真空中で $1/299792458$ 秒間に進む距離を1mとするということになった。重さの単位、キログラムの方は1気圧で最大密度の温度 (3.98°C) における水1000cm³の質量と規定された。白金イリジウム合金で作られている国際キログラム原器はまだ存在するようである。

こんどの理科年表における基本物理定数の改訂については、CODATA が5年の歳月をかけ、沢山の測定値を結ぶ関係式が矛盾なく成立するように大変な計算をやったうえで、調整された定数をきめ、セットの形で1986年発表勧告した事に基づいている。勿論、基本物理定数が変わったからといって、私が担当する化学Iの計算問題の解答が全部変わるわけではない。アボガドロ定数について言えば小数点以下4ケタ目から変わったわけであるが、3ケタ目までしか使っていない。ある雑誌によると、「5年前に比べ精度は約10倍向上したので、今回のような全面的改訂が今後行われる可能性はほとんどないようだ」との事である。それにしても、教科書、参考書、辞典などを出版している会社やそれに執筆している大先生方にとっては大変気になると思われる。

(化学 教授)